

漢文の訓読の方法には、三つの原則があります。

その第一は、上から順番に読む、ということです。なんだ、そんなことかと思う人もいるかもしれませんが、世の中には、いろいろな言語があって、中にはアラビア語のように、右から順に読んでいくものもあったり、縦書きをするのに左の行から読むなんていう言語があったりもします。日本語のように、縦に書いても横に書いても読める、なんていう言語の方が、むしろ珍しいのです。

第二の原則は、漢文にふられている「返り点」といわれる記号の指示に従って読むということです。返り点には「レ点」「二・二点」「上・下点」などがありますが、これについては、すでに昨年学習済みではないかと思えます。が、念のために書いておきます。

☆「レ点」とは、レの形をした返り点のことをいいます。

(返り点なしの場合)

我 登 山  
↓ 「我登山」とよむ。

(返り点ありの場合)

我 登 山  
↓ 「我山登」とよむ。

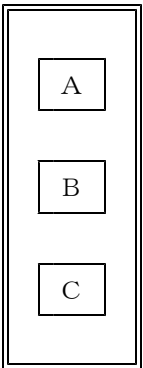
このように、「レ点」があるときには、第一原則の「上から順番」ということがはずされて、上下を逆に読むこととなります。

(次のようにレ点が入っているときには、どのように読むのが正しいでしょうか。)

	A		B
	1	レ	1
	2	レ	2
	3	レ	3
	4	レ	4
	5	レ	5
	6	レ	6
	7	レ	7
	(答3 2 1 5 4 7 6)		(答1 5 4 3 2 7 6)

☆「二・二点」は、レ点では手に負えないときに使います。すなわち、レ点では右で扱ったように、一文字づつしか戻ることができません。ですから、次の「ABC」を「BCA」と読もうとしても、レ点だけではどうしようもないのです。「二・二点」は、このようなときに使われます。その能力は、「間に文字をはさんで二文字以上戻ることができる」ということです。

(できるものならやってみよう。レ点だけでこれをBCAと読ませることができるだろうか)

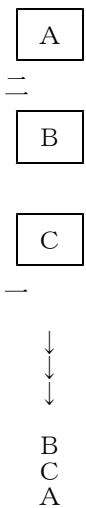


↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓やはり無理!

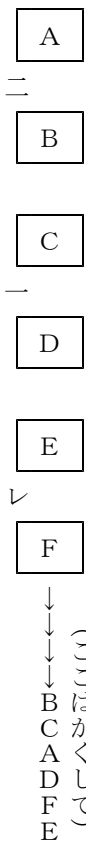
さて、では「一・二点」を使ってやってみよう。左の図を見て下さい。

「原則一」を意識しながら、上から読むのだね。ところが、一番上にある文字の左下には「二」という文字がある。これは、「二」の文字を読んだらすぐにここにある文字を読むということだから、いきなり最初から読んではいけない。そこで、その下の字を読むことになる。さらに、「原則一」に従って、その下を読もうとすると、「二」のついた字がある。この、「二」のついた

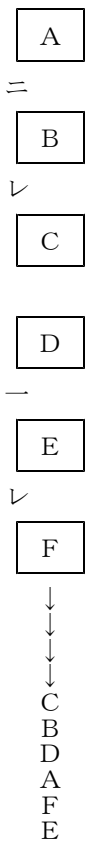
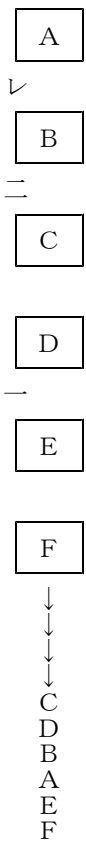
字を読まなければ、「二」にはいけないわけだから、こういう字は読まなければいけない。  
結局、このように返り点がふってあった場合には、「BCA」と読むのが正しいということになります。



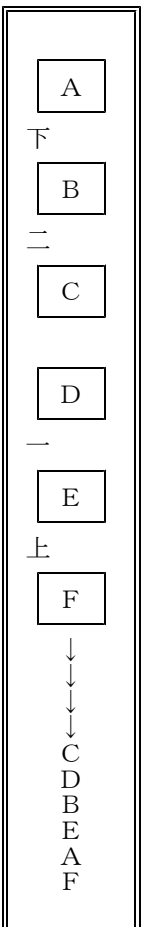
(例に従って読んでみよう)



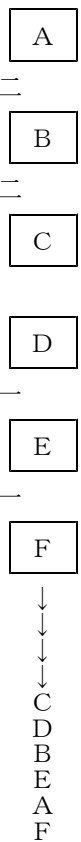
(ここはかくして)



☆「上・下点」とは・・・一二点と変わりませんが、一二点をはさんで戻りたいときに使います。



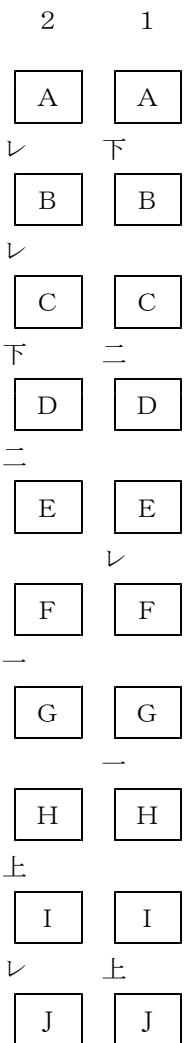
これを「僕はそんなものなしで表現してやる」などといって頑張ろうとすると、次のような表現になってしまうはずです。



これではややこしくなってしまう、同じ文字を二回読んでしまいますね。もつとも、同じ文字は二回読まないというきまりもあるのですが。(例外として、再読文字「未」などがあるが、ここでは扱わない。)

記号が多い方がややこしくならないということです。

返り点については、ほとんど説明終了です。他にも返り点はありませんが、中学校ではここまですれば上等です。では、返り点を駆使した問題を出してみますので、チャレンジしてみてください。



- A
- レ
- B
- 下
- C
- レ
- D
- 二
- E
- レ
- F
- 一
- G
- 上
- H
- レ
- I
- レ
- J

- (答)
- 1 ↓↓↓↓ B D F E G C H I A J
  - 2 ↓↓↓↓ E F D G H C B A J I
  - 3 ↓↓↓↓ F E G D C H B A J I

(何問できましたか。)

第三の原則は、「送りがないを上手に入れながら読む」ということです。こんなものは問題にならないと思う人がほとんどでしょうが、漢文訓読ではつまづきやすいところです。返り点と送りがなを同時に頭の中で処理するのは、結構骨の折れるものです。最初のうちは大変ですが、何度も読み返して、すらすら読めるようにして下さい。特に、漢文では、歴史的仮名遣いをしますので、読み間違いないように。

では、実際の漢文について、読みと内容の研究をしてみましょう。

子曰、「学而時習之、不亦説乎。  
 有朋自遠方来、不亦楽乎。  
 人不知而不愠、不亦君子乎。」  
 (学而)

子曰はく、「まなびて 時にこれを習ふ、またよろこばしからずや また説はしからずや。」

朋、えんぼうより 遠方より来たるあり、またたのしからずや また楽しからずや。

人知らずしてうらみず 愠みず、またくんしならずや また君子ならずや。」

習ふ↓↓「ふ」が「う」に変わる。(二は)行が二文字目以降に来るときには「あ」行にかわるから)  
 愠みず↓↓「うらみず」と読むところです。しかし、昔は「うらみず」と読んでいたのです。  
 日本語の活用も変化してきているのですね。

一行目について  
 子曰はく、とは、先生がこのようにおっしゃった、ということ。「論語」は孔子の語った内容を伝えるものだが、孔子自身が書いたものではない。孔子の教えを大切に守ってきた人々が著しまとめたものである。

★学びて時にこれを習う、とは復習することである。「学」と「習」とでは意味が違う。「学」は最初に何か(だれか)によって知識を得ることであり、「習」はそれを繰り返し復習することである。また、「時に」とあるのは「ときどき」ということでなく、「ちようどいい時に」ということである。また、「機会のある度に」という意味である。  
 孔子はこのような姿勢で学習することは「喜ばしい」といつている。「説」の字が「よろこばしい」とよまれているが、こうしたことは漢文では珍しくない。ひとつの文字にいくつもの意味があったって良いのである。(

「よろこばしからずや」とあるが、最後の「や」は、反語の「や」である。一見して疑問のようであるが、疑問ではない。これは強調の表現である。丁度「そんなことやっとっていいの」と同じで、きいているわけではない。それに対する答が相手の心の中に出て来れば、それでいいから、全部はいいわなのである。

### 二行目について

「朋」は「友」と同じと見てよい。この友は遠いところから自分のところまでやって来る「親友」である。そういう友達がいるということは楽しいことであるというのだが、君たちにはわざわざ遠くから訪ねて来るような友達がいるだろうか。「いる」という人もいるかもしれない。けれどもここで孔子の言う「友」が、「学友」のことであるというのと、どうだろうか。わざわざ遠くからやって来て、「人生について君はどんな考えを持っているね」とか「この間はペケペケの本を貸してくれてありがとう、ちよほど欲しかったんだが、お金がなくて困ってたんだ。今日はお礼にマルマルの本を持ってきたよ。ぜひ読んでもらって、君と人生について語り合いたいんだ。来週また来るから、それまでに読んでおいてくれたまえ。」などといつて互いの学力を高めあおうと精一杯頑張れる友人が存在するだろうか。

単に友人が遠くから訪ねて来ればそれでいいというものではないのである。なお、ここでいう「楽しからずや」とは、高級な楽しさのことであるから、ファミコンばかりやってる時の楽しさとは別のものである。

### 三行目について

「人が知らなくたってそれを不満に思わない。」というのが訳文になるであろうか。ちんぷんかんぷんである。古典は、この、訳のわからないところを補って考えるところに醍醐味があるといっている。

何を「知らない」のかというと、これは、自分のしている努力を知らないのである。自分には大望があるから努力して勉学に励んでいるのだが、誰もそれを知らないし、あの人は頑張っているな、と認めてくれるような人はいない。頑張っていることを知ってほしいのは、人間誰もが望むことではあるが、ほめられたいから頑張ろうとか、認めてもらおうために努力しようなどというのは、学問本来の目的ではない。世の中には、誰も認めてくれないのに、こつこつ努力を重ねて大成した偉人が何人もいる。そうなりたい、と見えない努力を重ねていく人こそが「君子」と呼ばれるにふさわしい人であると孔子は言うのである。

なお、君子は、人間としての品格にあふれた理想的な人格者のことである。教科書には登場しないが、君子の逆が「小人」であり、これはつまらないことにこだわってあくせくし、世俗の欲望から逃れることのできない教養狭く心も狭い俗人のことをいう。

以上、総合して振り返ってみると、孔子の理想としてしているのは、

1. いつでも勉学に励み、しばしば復習し、怠ることのない、
2. 互いに励ましあって学問の道を純粹に突き進もうとする友人のいる、
3. そして、認められなくとも意欲が減退することのない、そしてそのことで腹を立てるようなことのない、君子と呼ぶにふさわしい人物だということができる。